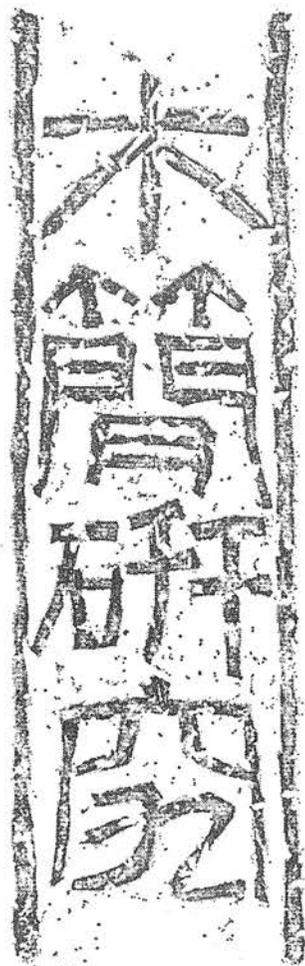


木簡研究

第一〇号

木簡研究

第一〇号



木
簡
学
会

題字 藤枝 晃 刻

目次

卷頭言——木簡学会の十年………原 秀三郎……… i

一九八七年出土の木簡……… I

概要	橋本義則	1	京都・千代川遺跡	土橋 誠	30
凡例	寺崎保広	9	京都・矢谷遺跡	衣川 栄一	31
奈良・平城宮・京跡	中井一夫・和田 萃	15	大阪・大坂城跡(1)	田中清美	33
奈良・興福寺勅使坊門跡下層	加藤 優	16	大阪・大坂城跡(2)	森 毅	36
奈良・藤原宮跡	加藤 優	19	大坂・梶原南遺跡	宮崎 康雄	40
奈良・藤原京跡	北村 憲彦	20	兵庫・宅原遺跡(豊浦地区)	安 田 滋	41
奈良・藤原京左京九条三坊	加藤 優	21	兵庫・長田神社境内遺跡	黒田 恭正	42
奈良・紀寺跡	土橋 誠	23	兵庫・書写坂本城跡	山本博利・秋枝 芳	43
京都・長岡宮跡	秋山浩三・渡辺 博	25	兵庫・砂入遺跡	西口 圭介	45
京都・長岡宮・京跡	清水みき	28	三重・杉垣内遺跡	河瀬 信幸	46
京都・鳥羽離宮跡	鈴木久男・前田義明	28	愛知・清洲城下町遺跡	鈴木 正貴	47
			愛知・岩倉城遺跡	松原 隆治	49

愛知・勝川遺跡

樋上昇 50

秋田・手取清水遺跡

山崎文幸 68

愛知・荊安賀遺跡

岩野見司 51

福井・角谷遺跡

田辺常博 69

愛知・山中遺跡

岩野見司 53

石川・横江荘遺跡

金山弘明 71

神奈川・小町一丁目一〇七番地点遺跡

島根・白坏遺跡

遠藤浩巳 73

手塚直樹・田畑佐和子 54

滋賀・宮町遺跡

鈴木良章 56

広島・草戸千軒町遺跡

下津間康夫 75

滋賀・川田川原田遺跡

畑本政美 58

山口・延行条里遺跡

水島稔夫 77

滋賀・光相寺遺跡

辻広志 59

山口・長門国分寺跡

水島稔夫 79

滋賀・妙楽寺遺跡

葛野泰樹 60

福岡・安養寺遺跡

倉住靖彦 81

長野・釜淵遺跡

望月静雄 63

福岡・金光寺跡推定地

大庭康時 82

福島・南古館遺跡

市川一秋 64

福岡・博多遺跡群(築港線関係第三次調査)

七田忠昭 83

山形・大楯遺跡

伊藤邦弘 66

佐賀・吉野ヶ里遺跡群

八尋実 85

佐賀・本告牟田遺跡

佐賀・本告牟田遺跡

一九七七年以前出土の木簡(二〇)..... 89

奈良・平城宮跡(第四四次)

鬼頭清明 89

中世木簡の一形態——山札・茅札についての覚書..... 石井進 93

雲夢睡虎地秦墓竹簡「日書」より見た法と習俗..... 工藤元男 113

木簡の保存処理..... 沢田正昭 130

凡 例

一、以下の原稿は各木簡出土地の発掘機関に依頼して、執筆していただいたものであるが、体裁および積文の記載形式等については編集担当の責任において調整した。

一、原稿の配列はほぼ奈良時代の五畿七道の順序に準じた。

一、積文の漢字はおおむね現行常用字体に改めたが、「實」「證」「龍」「廣」「盡」「應」等については正字体を使用し、異体字は「井」「非」「季」「躰」等についてのみ使用した。

一、積文下段のアラビア数字は木簡の長さ・幅・厚さを示す（単位はミリメートル）。欠損している場合は括弧つきで示した。その下の三桁の数字は型式番号を示す。またそれぞれの発掘機関での木簡の通し番号は最下段に示した。

一、積文に加えた符号は次の通りである（八頁第一図参照）。

「 」 木簡の上端ならびに下端が原形をとどめていることを示す。

「 」 木簡の上端・下端に切り込みのあることを示す。

「 」 抹消した文字であるが字画のあきらかな場合に限り原字の左傍に付した。

抹消により判読困難なもの。



欠損文字のうち字数の確認できるもの。



欠損文字のうち字数が推定できるもの。



欠損文字のうち字数の数えられないもの。



前後に文字のつづくことが推定されるが、折損等により文字が失われているもの。



異筆、追筆。



合点。



木簡の表裏に文字のある場合、その区別を示す。



校訂に関する注で、原則として釈文の右傍に付し、

本文に置き換えるべき文字を含む場合。



編者が加えた注で疑問の残るもの。



文字に疑問はないが意味の通じ難いもの。



同一木簡と推定されるが折損等により直接つながらず、中間の文字が不明なもの。



組版の関係で一行のものを二行以上に組まなければならなかった場合、行末・行初につけたもの。



図版に写真の掲載されているもの。



図版に写真の掲載されているもの。

一、地形図は原則として国土地理院発行の五万分の一地形図を使用し図名を（ ）内に示した。地図中の▼は木簡の出土地点を示す。

一、釈文の最下段に三桁で示した型式番号は、木簡の形態を示し、

つぎの一五型式からなる（八頁第2図参照）。

011型式 短冊型。

015型式 短冊型で、側面に孔を穿ったもの。

019型式 一端が方頭で他端は折損・腐蝕で原形が失われたもの。

021型式 小形矩形のもの。

022型式 小形矩形の材の一端を圭頭にしたもの。

031型式 長方形の材の両端の左右に切り込みをいれたもの。方頭・圭頭など種々の作り方がある。

032型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれたもの。

033型式 長方形の材の一端の左右に切り込みをいれ、他端を尖らせたもの。

039型式 長方形の材の一端の左右に切り込みがあるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

051型式 長方形の材の一端を尖らせたもの。

059型式 長方形の材の一端を尖らせたものであるが、他端は折損あるいは腐蝕して不明のもの。

061型式 用途の明瞭な木製品に墨書のあるもの。

063型式 用途未詳の木製品に墨書のあるもの。

081型式 折損、腐蝕その他によって原形の判明しないもの。

081型式 削屑。

081型式 削屑。

081型式 削屑。

081型式 削屑。

広島・草戸千軒遺跡出土木簡の型式番号は、広島県草戸千軒

町遺跡調査研究所『草戸千軒—木簡—』を参照されたい。なお
 その他の中・近世木簡については以上の型式番号に適合しないもの
 が多いので、注記を省略したものもある。

任下財椽人安万呂
 行夜使仍注状故移

×位下財椽人安万呂
 ×行夜使仍注状故移

泉進上材十二条中 又八条×
 桁一条

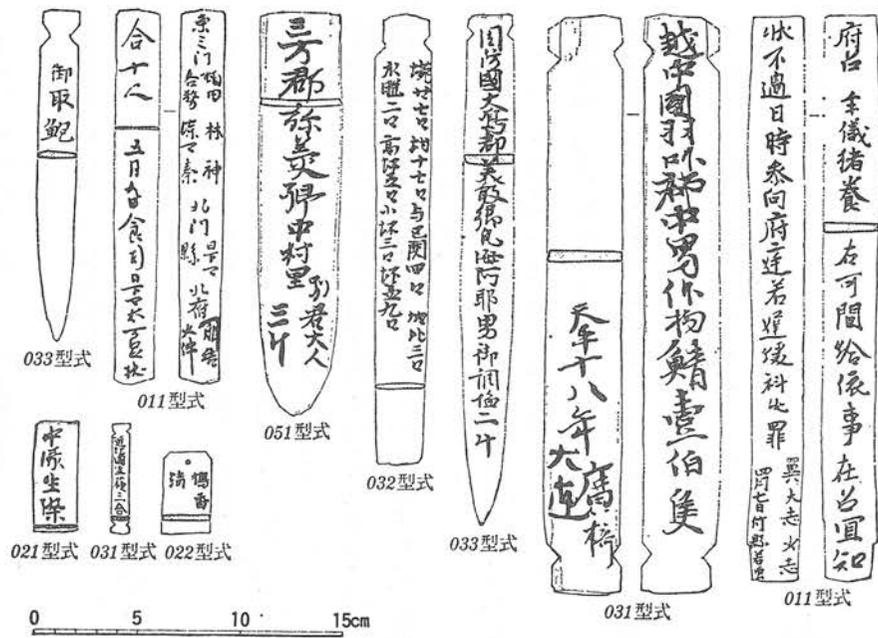
泉進上材十二条中 又八条×

武蔵国男衾郡余戸里大贄鼓一斗天平十八年十一月

請飯 番長二人 舍人十七人
 史生一人 右依例所請如件

請飯 番長二人 舍人十七人
 史生一人 右依例所請如件

第1図 木簡積文の表記法



第2図 木簡の形態分類

木簡学会役員

会長 平野 邦雄

副会長 大庭 脩

委員 青木 和夫

鬼頭 清明

早川 庄八

松下 正司

和田 萃

監事 田中 稔

幹事 綾村 宏

館野 和己

橋本 義則

吉川 真司

田中 琢

岩本 次郎

笹山 晴生

原 秀三郎

八木 充

長山 泰孝

加藤 優

寺崎 保広

村上 隆

狩野 久

佐藤 宗諄

町田 章

吉田 孝

栄原永遠男

東野 治之

本郷 真紹

奈良・平城宮・京跡

- 1 所在地 奈良市佐紀町・二条大路南一丁目・法華寺町
- 2 調査期間 平城宮朱雀門東地区 一九八七年(昭62)六月～七月、平城京左京三条二坊 一九八七年四月～一九八八年三月、同左京二条二坊十四坪 一九八八年二月～四月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 町田 章
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡・都城跡
- 6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
 - 一 朱雀門東地区(第一五七次補足調査)

調査地は、いわゆる第一次朝堂院と第二次朝堂院の間を南流する南北溝SD三七一五と宮南面大垣との交叉点である。検出した主な遺構は、SD三七一五・南面大垣及び南北塀一条である。

SD三七一五は、a・b・cの三期に区分でき、木簡が出土したa期の溝は幅約3m、検出面からの深さ約1・8mである。南面大垣と交叉する場所は開渠となることが判明した。木簡の出土点数は三六点(うち削屑二三点)である。

二 左京三条二坊(第一八四・一八六次調査)

デパートの建設に先立つ調査で、左京三条二坊の一・二・七・八坪の約四万㎡を対象として、一九八六年九月から発掘を開始し、現在も継続中である。一九八八年三月までに確認した遺構は、掘立柱建物一一七棟以上・掘立柱塀四〇条以上・井戸二四基・溝三五条以上と多数にのぼり、これらは大きくA～Dの四期に区分できる。

A期は奈良時代初期から前期にあたり、四つの坪を一体として利用している。四つの坪の中央やや南にあるSB二一〇が正殿と考えられ、建物規模が桁行七間、梁行五間で南北に庇のつく掘立柱建物である。これを取り囲むようにいくつかの建物が配置され、その外側を掘立柱塀がめぐる。

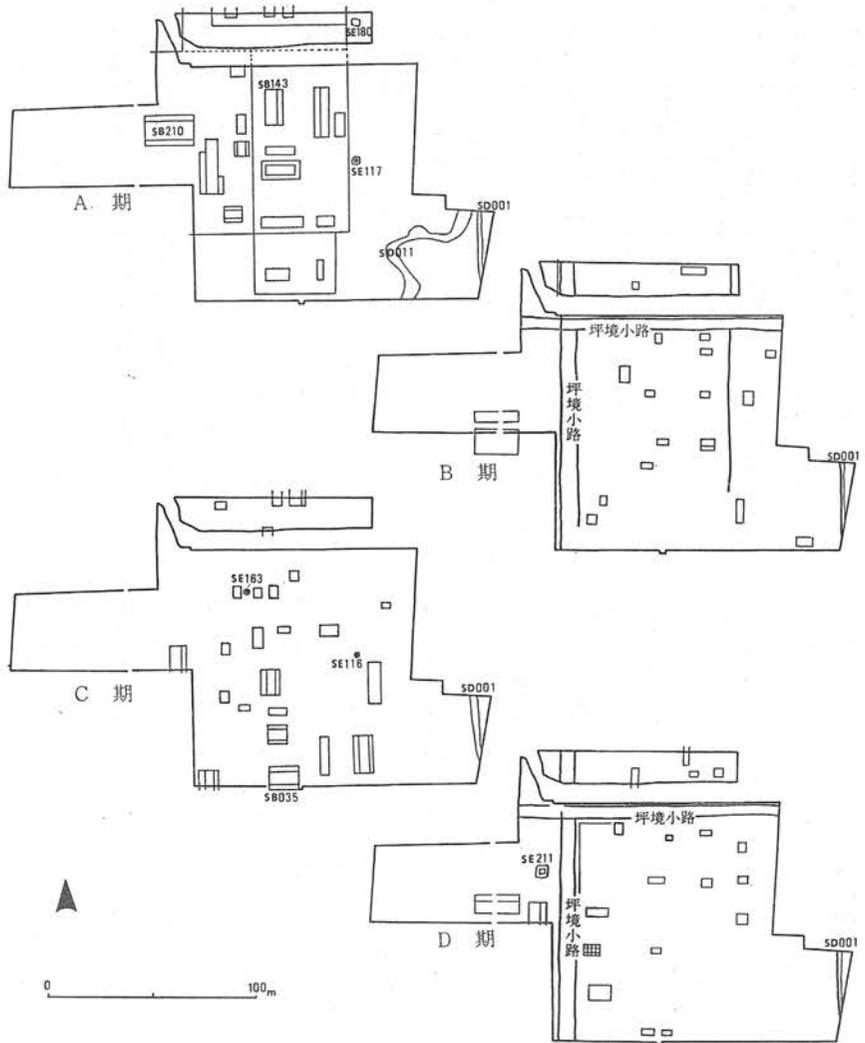
B期は奈良時代中期にあたり、各坪の間に坪境小路が作られ、一坪以下の宅地に細分される。

C期は奈良時代後期で、坪境小路がとりはられ、再び四坪規模の敷地となる。この時期は区画の塀がみられない。中心建物は調査区の西南方にあつたのではないかと推定している。

D期は奈良時代末から平安時代初期にあたり、再び坪境小路をつくり、一坪以下の敷地となる。

木簡が出土した遺構とそれぞれの出土点数は次の通りである。

南北溝SD〇〇一から一一一点(うち削屑八点)、蛇行溝SD〇一から一点、掘立柱建物SB〇三五から一点(以上第一七八次)、井



左京三条二坊遺構變遷略圖

戸SE一一六から一点、井戸SE一一七から一点(削層九点)、掘立柱建物SB一四三から二点(削層二点)、井戸SE一六三から一点(削層一点)(以上第一八四次)、井戸SE一八〇から二二八点(削層一〇八点、井戸SE二一一から一点(以上第一八六次)の合計三五七点(削層二二八点)である。

このうち本誌九号に第一七八次調査の成果を報告したので、それ以外の遺構について略述する。

SE一一六とSE一一七は調査区中央東寄りで検出した井戸である。SE一一六は奈良時代末に廃絶した縦板組み横棧止めの方形井戸で、その埋土から木簡が出土した。SE一一七はA期に属し、内法一辺一一〇cmの横板を井げたに組んだ方形井戸で、この埋土および抜取穴から木簡が出土した。

SB一四三は正殿と考えられる建物SB二一〇の東の区画にある六間×三間の東庇つきの掘立柱建物で、A期に属する。この建物の南側柱の抜取穴から木簡が出土した。

SE一六三は正殿とSB一四三の間に位置する円形の井戸で、下段は曲物を積み重ね、上段は縦板組みにしている。奈良時代末に廃絶したが、木簡はその埋土から出土した。

SE一八〇は調査区の東北辺で検出した井戸で、井戸枠がすべて抜き取られており、現状では南北一・九m、東西二・三m、深さ二mの土壇である。この埋土は層位をなしており、同一層からま

つて木簡が出土した。木簡の年紀はいずれも養老元年(霊龜三年)であり、この後ほどなく埋められたのであろう。伴出した土器の年代もこれと矛盾しない。

SE二一一は正殿と重複して検出された方形の井戸で、一辺五mの大きな掘形の中に、内法一三五cmの横板組みの井戸枠が二三段残存していた。木簡はこの埋土から土器・瓦・斎串・銅銭(和同・万年・神功)などと共に出土した。土器の年代は平安時代初期である。

三 左京二条二坊十四坪(第一八九次調査)

店舗建設に伴う事前調査として実施した。調査区は坪の南端部にあたり、面積は約一四〇〇m²である。奈良時代〜平安時代の遺構は掘立柱建物三棟・掘立柱塀一二条・井戸一基などである。

木簡は井戸SE四〇から出土した。SE四〇は直径二・四m、深さ二・八mの縦板組みの円形井戸で、その埋土から斎串や平安初期の土器などとともに一点の木簡が出土した。

8 木簡の釈文・内容

一 朱雀門東地区

南北溝SD三七一五

(1) 「中等

(35)×10×3 019

調査地はいわゆる第二次朝堂院の南で、式部省推定地とあい対する場所にあたり、以前の調査ではこの近辺から「兵部」「兵厨」等

の墨書土器が出土しており、兵部省に近接している可能性が高い。
この木簡も官人の考課に関わるものとすれば、兵部省から流れてきたものか。

二 左京三条二坊

南北棟建物SB一四三柱抜取穴

- (1) 従八位下小長谷連□

091

井戸SE一八〇

- (2) ・□^{〔若〕}翁帳内□大□^{〔漆カ〕}土師梗万呂秦望万呂大伴廣万呂

|| 少野稻□□

・「口飯斗老朝受則廣万呂養老元年十二月廿二日

|| 大甔

351×23×4 011 *

- (3) ・「侍少子^{子老}字甘酒達^{弟上}国嶋久比石見石末呂

・「十四口飯二斗八升受石見六廿月七日

207×21×5 011 *

- (4) 帳内一人□

091

- (5) ・「長屋皇□^{〔宮カ〕}俵一石春人夫

・「羽咋直嶋

175×25×6 051

- (6) ・□^{〔長カ〕}屋□^{〔皇カ〕}宮俵一石春人夫

・「羽咋直嶋

182×21×5 051

- (7) ・「^{〔屋カ〕}長□^{〔皇カ〕}皇宮一石□□

・「^{〔屋カ〕}羽咋直嶋□□□□

160×18×6 033

- (8) ・「犬六頭新飯六升瘡男

・「六月一日麻呂

165×23×5 011 *

- (9) 「此取人者逃女成」

140×19×3 011 *

- (10) 「西店六合五夕」

70×13×1 011 *

- (11) 西宮

091

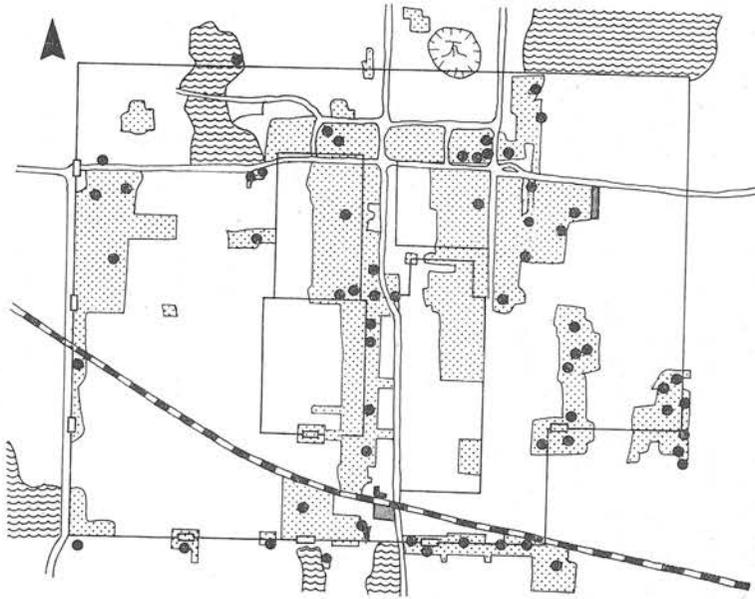
- (12) ・「^{〔武藏国〕}郡宅□^{〔郡宅〕}駅菱子一斗五升

・「^{〔靈龜三年十月〕}靈龜三年十月

178×21×5 032

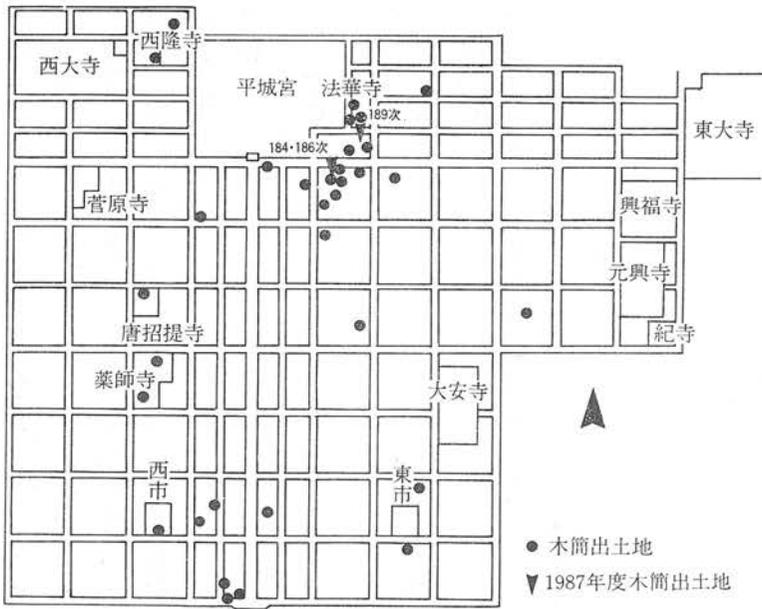
- (13) 「^{〔鹿千史〕}鹿千史

115×14×4 032



- 既発掘地
- 木簡出土地
- 1987年度発掘地
- 1987年度木簡出土地

平城宮木簡出土地点図



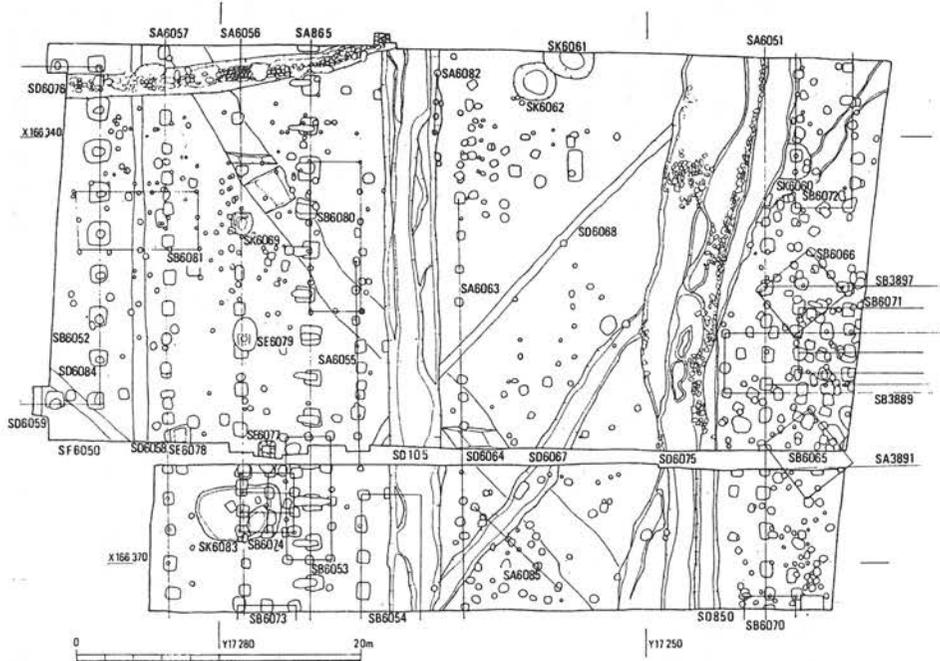
- 木簡出土地
- 1987年度木簡出土地

平城京木簡出土地点図

奈良・藤原宮跡

- 1 所在地 奈良県橿原市高殿町
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)五月～十二月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 牛川喜幸
- 5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡
- 6 遺跡の年代 七世紀末～一〇世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

藤原宮第五五次調査として実施したもので、調査地は大極殿の東北二〇〇mにあり、東方官衙地区と内裏地区にまたがる。調査は東西五七m、南北四〇mの水田で行い、調査面積は二一五〇㎡である。検出した主な遺構は、内裏東外郭を限る南北塀SA八六五、SA八六五の西の内裏内にある大規模な南北棟建物SB六〇五二、SA八六五の東にある宮内基幹水路(東大溝)SD一〇五、東方官衙の西を限る南北塀SA六〇五一、SA六〇五一とともに官衙地域を区画する南北溝SD八五〇、官衙内の東西棟建物SB三八九七等がある。木簡はSD一〇五から三五点出土した。この他に藤原宮期以前の遺構で、弥生時代の斜行溝、古墳時代の斜行溝・掘立柱建物・土墳、七世紀代の掘立柱建物・掘立柱塀・道路・素掘溝・土墳、藤原宮以



第55次調査遺構図

後で、奈良時代の掘立柱建物・掘立柱塼・素掘溝、平安時代の掘立柱建物・掘立柱塼・石組溝・素掘溝・井戸等を検出した。

遺物は、木簡の他に土器（縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・施釉陶器・製塩土器・墨書土器）・土馬・陶硯・瓦（軒瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・隅木蓋瓦）・斎串・錢貨（万年通宝・隆平永宝）・金属製品（帯金具・刀子・鉈）・石製品（砥石・紡錘車・管玉・有孔円盤・石鏃・剣片刃器）・ガラス玉などがあるが、多くはSD一〇五や平安時代の溝からの出土である。

今回の調査により、内裏内に大規模な建物があることを確認した。当調査地は平城宮の東外郭官衙地域に相当する場所であり、同様の性格が考えられる。また、東方官衙の西限区画施設を確認したことにより、以前の調査と合わせて、この官衙ブロックの規模がほぼ東西六六m、南北八八mと推定できることとなった。

木簡の出土したSD一〇五は、当調査地の北で一九六六・六七年に奈良県教育委員会により、南で一九七一年に奈良国立文化財研究所の第四次調査により確認しており、木簡も多数出土している。今回の調査では南北四〇mを検出し、これまでで最長の調査規模であったが、木簡は少なかった。溝幅は四m、深さ〇・八mで、堆積層は三層に大別でき、上層の暗褐色粘質土には遺物が少なく、中層の暗灰色粘質土には木炭・土器・瓦を多く含む。中層の下面に木片を含む層があり、その中から木簡が出土した。下層の暗灰色粗砂層か

らは土器が多量に出土した。

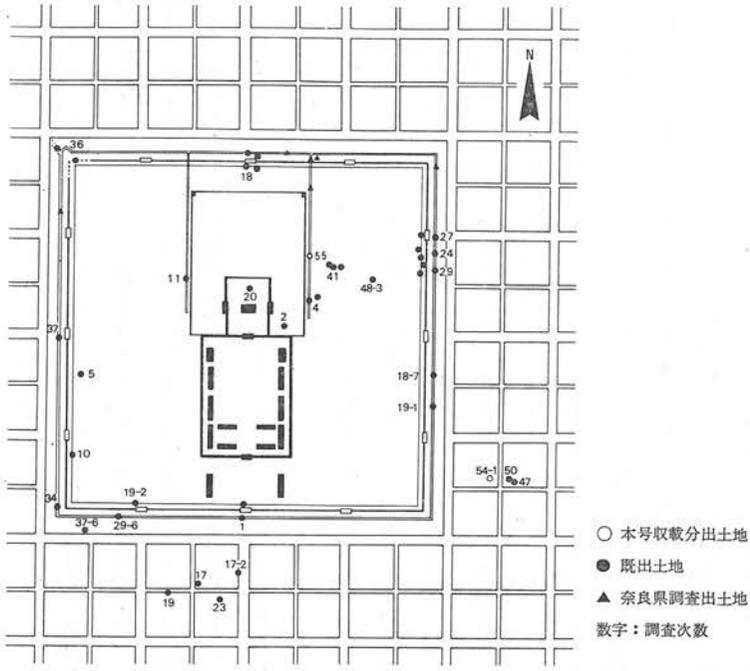
8 木簡の積文・内容

- | | | | |
|-----|----------------------------------|-----------|-----|
| (1) | 「 ^{奈良里} 依治郡蝦」 | 117×32×4 | 031 |
| (2) | 「 ^{五カ} 中 ^本 」 | (73)×17×4 | 081 |
| (3) | 「 ^{樹葉} 緑」 | | 091 |
| (4) | 「夏艘」 | 107×12×3 | 051 |
| (5) | 「 ^{上カ} 評和佐里」 | | |
| | ・「 ^郡 方俵」 | 108×24×3 | 011 |

三五点の木簡のうち二七点は削屑で、中には直接接続はしないが同一木簡の断片とみられるものもある。

(1)の依治郡は隠岐国隠地郡に当たるとであろう。平城宮内裏東大溝出土木簡の中に「^{郷カ}役道郡奈具」と記したものがあがるが、奈良時代の木簡では隠地郡は「^{郷カ}役道郡」と表記するものが多く、「依治」は「^{郷カ}役道」に通ずると思われる。

(5)の和佐里は『和名抄』に相当の郷がない。「^{上カ}郡方」は人名であろうか。



藤原宮木簡出土地点略図

木簡研究 第九号

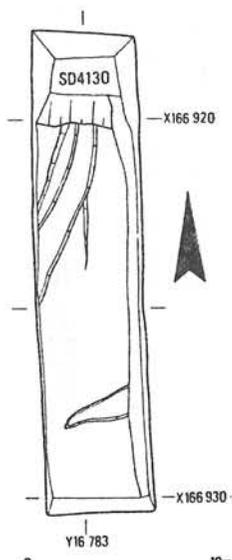
巻頭言

田中 稔

一九八六年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 興福寺旧境内 藤原京跡 和田麿寺
 橋寺 曲川遺跡 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 長
 岡京跡(4) 平安京右京三条二坊八町 平安京右京五条一坊三
 町 平安京右京三条二坊八町 平安京右京五条一坊六町 平
 安京右京八条二坊二町 平安京右京八条二坊十二町 伏見城
 跡 大坂城跡 安堂遺跡 津田トッパ遺跡 萱振A遺跡
 弥布ヶ森遺跡 但馬国府推定地 初田館跡 福田片岡遺跡
 清洲城下町遺跡(1) 清洲城下町遺跡(2) 居倉遺跡 土橋遺跡
 駿府城三の丸跡 東京大学構内遺跡 浜野川遺跡 神照寺坊
 遺跡 浄琳寺遺跡 光相寺遺跡 吉地薬師堂遺跡 胆沢城跡
 根城跡 生石2遺跡 新青渡遺跡 弘田柵跡 田名遺跡 曾
 万布遺跡 辻遺跡 富田川河床遺跡 草戸千軒町遺跡 周防
 国府跡 中島田遺跡 大宰府跡 井相田C遺跡 吉野ヶ里遺跡
 一九七七年以前出土の木簡(九)
 平城宮跡(第三二次補足調査) 稲岡耕二
 国語の表記史と森ノ内遺跡木簡 大庭 脩
 敦煌凌胡陰址出土冊書の復原 佐藤宗諄・橋本義則
 漆紙文書集成 東野治之
 正倉院木簡の用途——原秀三郎氏の所説に接して—— 平野邦雄
 岸俊男会長の思い出 稟報

頒価 三八〇〇円 千四〇〇円



第 54-1 次調査遺構図

奈良・藤原京跡

- 1 所在地 奈良県橿原市木之本町
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)四月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 牛川喜幸
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 七世紀末〜八世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

藤原宮第五四一一次調査として行ったもので、調査地は藤原京左京六条三坊西北坪の東南部にあたり、第五〇次(西)調査地(木簡研究『第九号参照』)の西約二〇mの地点である。東西三m、南北二・八mの調査区を設定して行い、面積は三八・四m²である。

主な遺構は第五〇次調査地より続く東西大溝SD四一三〇で、調

査区の北端で南岸から幅二・六m分を検出した。しかし想定位置より約一〇m北へずれるため、この地点と第五〇次調査地との約二〇mの間で溝が屈曲しているとみられる。深さは一・六m、堆積は三層あり、上・中層は奈良時代、下層は藤原宮期である。木簡は中層から一点出土した。他に上層からパルメット押捺文軒平瓦、下層から山田寺系の単弁八弁蓮華文軒丸瓦が出土した。

8 木簡の积文・内容

(1) 「〈尾張国海部郡魚鮪三斗六升〉」

172×20×5 031

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(Ⅰ)』

(一九八七年)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査概報一八』(一九八八年)

(加藤 優)



(吉野山)

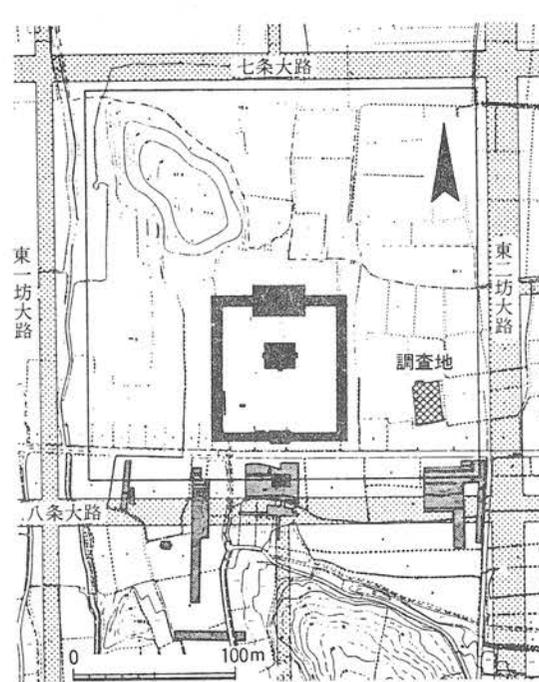
紀寺の造営・廃絶の時期

未調査の東南部に想定される。
金堂西南部にも検出されず、
された。塔は中軸線上にも、
取り付く南面大垣等が確認
り付く伽藍配置と、南門に
門から出た回廊が講堂に取
堂・講堂が南北に並び、中
考えられている。一九七四年に発掘調査が行われ、南門・中門・金

奈良・紀寺跡

- 1 所在地 奈良県高市郡明日香村大字小山
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)八月～九月
- 3 発掘機関 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部
- 4 調査担当者 代表 牛川喜幸
- 5 遺跡の種類 寺院跡
- 6 遺跡の年代 七世紀後半～八世紀初頭
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

紀寺跡は藤原京左京八条二坊にあり、平城京の紀寺の前身寺院と

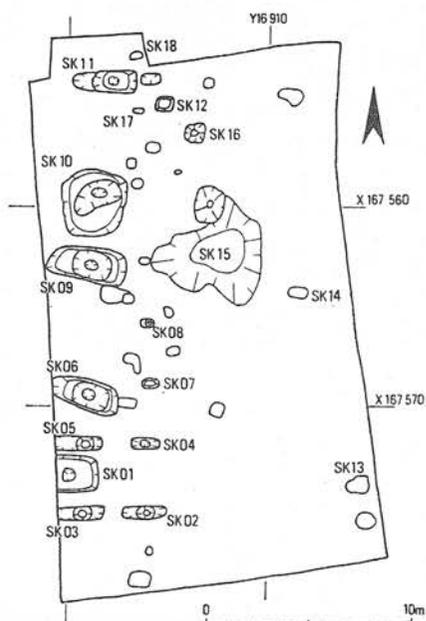


紀寺跡伽藍配置図

はあまり明瞭ではないが、軒瓦等から金堂等の中心伽藍は七世紀後半代に、南門や大垣は藤原宮の造営と並行して整備されたと考えられ、金堂跡に瓦窯の作られる奈良時代末～平安時代初めには廃絶していたとみられている。

今回の一九八七―一次調査は、寺域東南部で水田改良工事の事前調査として行ったもので、調査地は南北二六m、東西一五m、面積は三九〇㎡である。

検出した主な遺構は、大小一六基の土壇である。これらの土壇は東西方向の溝状を呈するものが多く、調査地の西寄りに南北に並ぶ。



1987-1 次調査遺構略図

形態や埋土の状況、遺物の種類はほぼ同じである。一例を示すと、SK11は東西二・二m、南北一・一m、深さ一・四mで、中央部は円形でやや深い。埋土は、上層は木炭・瓦・土器・焼土を含む暗褐色粘土であり、中層は銅滓・木炭を含む短期間に埋められた層、下層は砂・葉を含む青灰色粘土である。多くの土壙から炉床・フイゴ羽口・埴埴・湯口・バリの屑が出土した。SK10には漆の容器として使用された大量の壺類が一括投棄されていた。また僅かながら金箔が出土した。

これらの土壙は紀寺造営終了時に、鋳銅工・漆工・箔工等が作業していた工房の廃止に伴い、不用物を投棄したものとみられ、それは藤原京の造営に伴う寺域内外の整備とも関連するのであろう。

木簡は銅滓層下の木製品・木片・自然木・葉を含む層と、銅滓層上の粘土層から一四点出土した。ほとんどが断片か削層で、人名とみられるものが二点ある他は意味の取れるものが少ない。

8 木簡の積文・内容

(1) 下毛野人 □ 091

(2) [「下カ」] □ 118×25×3 033

(3) ・×□可三万呂 (目カ) □ (108)×28×2 081

9 関係文献

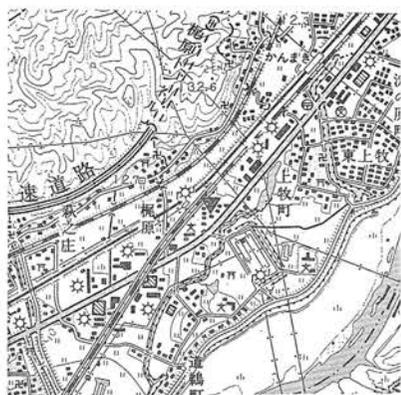
奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報一八』(一九八八年)

(加藤 優)

大阪・梶原南遺跡

かじわらみなみ

- 1 所在地 大阪府高槻市五領町
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)四月～八月
- 3 発掘機関 梶原遺跡調査会
- 4 調査担当者 富成哲也・宮崎康雄
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都西南部)

梶原南遺跡は、大阪平野の北東最奥部に位置する。遺跡は北摂山地と淀川に挟まれた氾濫平野にあり、その範囲は東西二〇〇m、南北二五〇mと推定される。一九八三年度より三次にわたって、府営住宅新築にもなう発掘調査を梶原遺跡調査会が実施した。第一・二次調査では、弥生・古墳時代の溝や奈良時代の掘立柱建物を検出し、羽口や鉄滓が出土している。今回の

第三次調査では、弥生時代の竪穴式住居や奈良時代の掘立柱建物・井戸などを検出し、弥生土器や石器類、八世紀に属する土師器・須恵器・木製品・銅製帯金具及び鑄造・鍛造関係の遺物などが出土した。

木簡は八世紀中頃に属する井戸2の底で検出した。この井戸は方形の掘形を呈し、一辺一・三m、深さ一mを測る。井戸枠は隅柱を使用せず、横棧で側板を受ける構造である。上下二段分みとめられ、下段の内法は〇・三五mを測る。伴出遺物としては、ヒノキの火つけ木と少量の土器類があげられる。

8 木簡の积文・内容

(1) 「新屋首乙売」

228×24×3 0.61

粗く調整したヒノキ材の片面上半部に記されている。「新」は赤外線カメラによって判明したもので、新屋首は『新撰姓氏録』に記載されていない氏族である。その名からみて、この人物は女性であると考えられる。

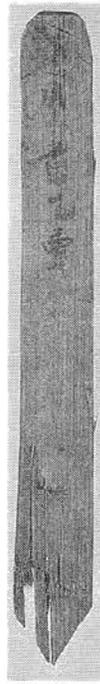
梶原南遺跡の西方約一〇kmには式内社新屋坐天照御魂神社が鎮座している。その周辺地域は律令期には摂津国嶋下郡新屋郷であったとされており、新屋首の活動本拠もその付近にもとめられよう。この木簡が梶原南遺跡で出土した理由は明らかでないが、この地と新屋郷との関係をしめすものであろう。木簡が井戸底から出土したこ

と、人名のみ記していること、荷札・付札などの一般的な木簡とは異なり齋串に類似した形態であることなどから考えると、何らかの祭祀に使用した可能性もある。

9 関係文献

梶原遺跡調査会『梶原南遺跡発掘調査報告書』（一九八八年）

（宮崎康雄）



兵庫・書写坂本城跡
しよしゃざかもとじょう

- 1 所在地 兵庫県姫路市書写西坂本字構江
- 2 調査期間 一九八一年(昭56)二月～一九八二年四月
- 3 発掘機関 姫路市教育委員会
- 4 調査担当者 山本博利・秋枝 芳
- 5 遺跡の種類 集落跡・城館跡
- 6 遺跡の年代 平安時代後期、室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構



書写坂本城跡は、姫路市街地より北西へ約6km、天台系の山岳寺院である書写山円教寺の南麓に位置する。当城跡のある西坂本から東坂本にかけては、古来、因幡街道沿いの要衝として、また、円教寺の門前町・宿場町として大いに栄えたりしい。坂本城は、室町時代に守護赤松氏の領国支配の拠点として、重要な行政機能を果たしたが、城跡の実態は今一つ不明である。

た。

一九八一年、城跡を東西に横切る形で道路建設計画が持ち上り、姫路市教育委員会では、翌一九八二年にかけて発掘調査を実施した。

その結果、東・西両堀跡と西側土塁を検出し、東西規模がほぼ一五〇～一六〇mであることを確認した。しかし、城跡が江戸時代に一時池として利用された関係か、城内部分の遺構の残り具合が極めて悪く、わずかに素掘りの井戸一基・溝二条・掘立柱穴若干を検出するに留まった。

木簡二点と柿経の断片は、いずれも東堀の堀底に堆積した灰色砂層、および灰色粘質土層中に包含されていた。伴出遺物には、ほぼ一五世紀代に収まる備前焼をはじめとした陶磁器類や、各種木製品および植物性遺物がある。これらの遺物の大半は、坂本城関連遺物として間違いないと思われるが、ただ、東堀が北方に位置する書写山系の谷筋に相当している関係上、上手からの流入の可能性を完全には否定しきれない。

なお、東堀付近から城外にかけての区域から、平安時代後期の集落跡の存在を裏づける遺構、遺物が検出されている。

8 木簡の积文・内容

(1) □神王守護

(32) × (15) × 2 081

(2) □^{〔梅カ〕}

・ □^{〔字カ〕}

(40) × (19) × 1 081

(3) 「普於其中□

061

(4) 具聞威音王

061

(5) □□為衆生演□

061

(6) □種種因縁□

061

9 関係文献

兵庫県史編集専門委員会編「書写坂本城跡発掘調査の概要」(『兵庫県史』第一九号 一九八三年)

(山本博利・秋枝 芳)



兵庫・砂入遺跡^{すなはいり}

- 1 所在地 兵庫県出石郡出石町田多地字持アミほか
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)一月～三月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 西口圭介・藤田 淳・甲斐昭光
- 5 遺跡の種類 祭祀遺跡
- 6 遺跡の年代 九世紀
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要
遺跡は、豊岡盆地の東端に位置し、南西約1kmには出石川が北流する。小野川(六方川)の河川改修工事にもない発掘調査を実施した。調査地は小野川の旧河道にあたり、しがらみを検出している。木簡(1)は九世紀代の木製祭祀遺物群と共に河道内より出土し、木簡(2)は層位からみて、(1)より新しいものと考えられる。祭祀遺物は墨書人形・馬形を含み、総数二〇〇〇点を

(出 石)

た。調査地は小野川の旧河道にあたり、しがらみを検出している。木簡(1)は九世紀代の木製祭祀遺物群と共に河道内より出土し、木簡(2)は層位からみて、(1)より新しいものと考えられる。祭祀遺物は墨書人形・馬形を含み、総数二〇〇〇点を

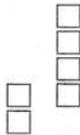
越える。墨書土器は五点出土し、「出石二」「西」「諸」「福(内面に墨書)」「开」と判読出来る。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「交」

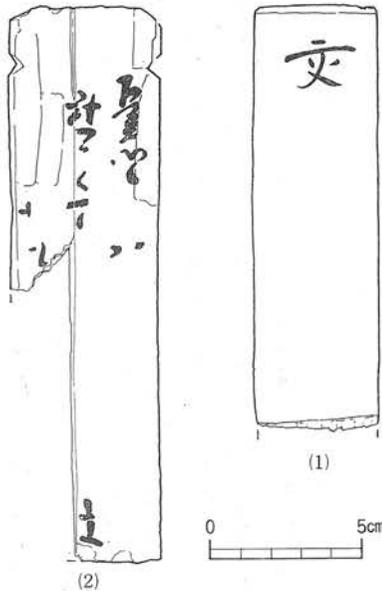
(143)×42×6 011

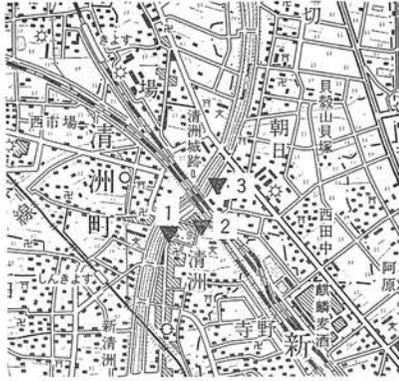
(2) 「<下里郷」



185×50×5 032

(2)は赤外線カメラにより判読した。下里郷は「但馬国太田文」の出石郡下里郷、『和名類聚抄』では資母郷にあたり、現在の出石郡但東町中山周辺に比定される。出石郷に属する砂入遺跡より出石川沿いに約二〇km上流にあたる。
(西口圭介)





(名古屋北部)

愛知・清洲城下町遺跡

きよす

- 1 所在地 愛知県西春日井郡清洲町
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)四月～一九八八年三月
- 3 発掘機関 財愛知県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 細野正俊・水谷朋和・佐藤公保・鈴木正貴・中野良法・飴谷 一
- 5 遺跡の種類 城郭・都市跡・集落跡
- 6 遺跡の年代 古墳時代後期～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

清洲城下町遺跡は濃尾平野を流れる五条川の自然堤防及び後背湿地上に位置する。発掘調査は一九八一年度から継続的に行われ、一九八七年度は一四カ所の調査区で、合計八〇〇〇㎡実施した。

遺跡は、清須城が存続した時期だけでなく、古墳時代後期から江戸時代までに及び、五期に大別できる。

木簡類は清須城に関連する一六世紀代の遺構から出土した。また、平安時代後期の掘立柱建物が廃絶した際に投棄されたとみられる墨書灰釉陶器が数十点出土している。

一 六二C調査区

五条川河川改修にともなう事前調査として実施。調査地点は内堀と中堀の間に位置し、清須城に関連する遺構は、約1mに及ぶ大規模な整地層を境に二期に区分できる。前期(一六世紀前半)では、五条川旧河道とみられる自然流路NR〇一が存在し、そこから木簡類が出土した。後期(一六世紀末)では、溝・井戸等が存在し、溝SD〇四から土師器皿・漆椀にともなって木簡類が出土した。

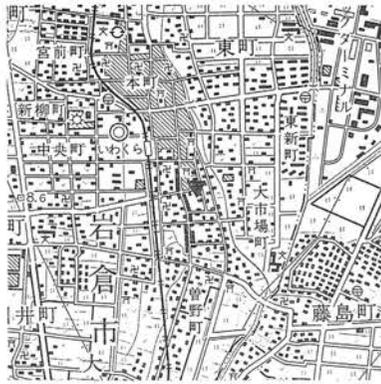
二 六二E調査区

県道新川・清洲線関連の調査として実施。調査地点は内堀と中堀の間に位置し、L字状に屈曲して平行に走る溝二条を検出した。これは、屋敷地を囲む方形の溝の一部とみられ、一六世紀前半に位置づけられる。木簡類はこの溝と交わるほぼ同時期の溝SD〇三から、瀬戸・美濃産の施釉陶器にともなって出土した。

三 六二G調査区

五条川河川改修にともなう事前調査として実施。調査地点は内堀と中堀の間で、清須城跡の対岸に位置する。ここでは、現在の五条川に直交する形の溝SD〇七・SD〇三と、これを埋めた後に掘削した現五条川に平行して走る溝SD〇一が存在した。木簡類は溝S

愛知・岩倉城遺跡



(名古屋北部)

跡の北部を東西に横切ったために事前発掘調査を実施した。発掘調査では掘立柱建物・土壇・溝等を検出した。内堀と推定される幅約六m、深さ約二mの溝から、土師質皿、瀬戸・美濃系陶器、中国陶磁、木製品、竹製品等が多数出土した。木簡は

- 1 所在地 愛知県岩倉市下本町字城跡
- 2 調査期間 一九八八年(昭63)一月～三月
- 3 発掘機関 (財)愛知県埋蔵文化財センター
- 4 調査担当者 平野 清・平田睦美・松原隆治
- 5 遺跡の種類 城郭跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代後期、古墳時代中期、室町時代後期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

岩倉城は、織田信長の居城清須城の北北東約八kmに位置し、五条川右岸の標高約一〇mの自然堤防上に立地する。県道が岩倉城本丸

二点ともこの溝の最下層から出土した。なお城跡の下層では方墳や弥生後期の住居跡を確認した。

8 木簡の积文・内容

- (1) 「×^{*} 羸鬼急々如律令 羸」 210×22×1 051

「×」は以点もしくは水点、次は梵字で ham、その下は符籙、「急々如律令」は呪句、「羸」は四縦五横で「臨兵闘者皆陳烈在前」の九字を意味する。符籙に申でなく甲を用いていることから、病氣祓いの呪符木簡と考えられる。

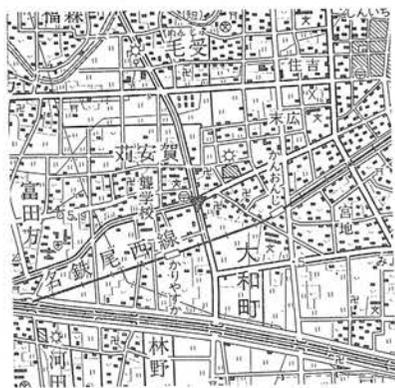
- (2) 「×□羸□×」 (80)×23×1 019

以点の下は梵字 E^{H} 、符籙「羸」の次は「屍」の可能性が大きい。(1)と同じく、病氣祓いのための呪符木簡と考えられる。

积文・内容について、奈良大学水野正好、奈良国立文化財研究所加藤優の両氏の御教示を得た。

(松原隆治)





(名古屋北部)

水管工事の際、遺物出土の連絡があり調査したが、遺構は既に掘削され、遺物を採集した。木簡は地表下約一・五mから陶磁器・漆器・獣骨(イヌ・キツネ・イノシシ)などと一緒にゴミ穴に投棄されたような状態で出土した。

愛知・^{かりやすか}荊安賀遺跡

1 所在地 愛知県一宮市大和町荊安賀

2 調査期間 一九七二年(昭47)二月

3 発掘機関 一宮市史編さん室

4 調査担当者 岩野見司

5 遺跡の種類 集落跡

6 遺跡の年代 一六世紀後半～一七世紀前半

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

荊安賀は一六世紀後半に築かれた荊安賀城の城下町であり、標高約五mの自然堤防上に立地する。西尾張中央道の建設にともなう排

8 木簡の積文・内容

(1) ×すくわな町
×すくわな町

×いち日の事

×^[九]□日十四日十九日

×廿九日たち申候
旨

×あるべく候

×いろ／＼ニ可仕候

×月一日

(115)×191×1 065

清須の六斎市に関する告知木簡である。「くわな町、なかしま町」の名前は清須・名古屋城下に存在する桑名町と長島町で、名古屋の両町名は慶長一六年(二六二)清須から移したものである。両町名の上の一字が「す」であり、欠損部分に「きよす」とあったものと思われる。毎月四・九の日に開かれた清須の六斎市を荊安賀の人々に知らせるべく出土地附近に掲げられたものであろう。なお、木簡の積読は国立歴史民俗博物館塚本学・南山大学新井喜久夫両教授に負う。

9 関係文献

『新編 一宮市史 本文編 上』(一九七七年)

『新編 一宮市史 資料編補遺二』(一九八〇年)

(岩野見司)



木簡出土遺跡賀安刈

木簡研究 第八号

巻頭言——最後まで残る仕事——

青木和夫

一九八五年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京左京三条六坊七坪 平城京右京七条一坊十五坪 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 平安京左京三条三坊十一町 平安京左京六条一坊八町 平安京左京九条三坊十四町 平安京右京八条二坊二町 平安京右京八条二坊五町 鳥羽離宮跡 伏見城跡 西ノ辻遺跡 観音寺遺跡 大銅堂廢寺 穗積遺跡 玉津田中遺跡 辻井遺跡 長尾沖田遺跡 但馬国府推定地 朝日西遺跡 大淵遺跡 杵掛城跡 勝間田城跡 神明原・元宮川遺跡 今小路周辺遺跡 鶴岡八幡宮境内研修道場用地遺跡 鹿島湖岸北部条里遺跡 西河原森ノ内遺跡 勸学院遺跡 金剛寺城跡 柿堂遺跡 法界寺跡 今泉城跡 富沢水田遺跡 中尊寺伝三重池跡 胆沢城跡 浪岡城跡 俵田遺跡 秋田城跡 九十九橋 一乗谷朝倉氏遺跡 三木だいもん遺跡 弓庄城跡 番場遺跡 小島西遺跡 富田城跡 草戸千軒町遺跡 尾道遺跡 備後国府跡 秋月遺跡 大宰府跡 大宰府条坊跡 豊前国府跡 如法寺遺跡

一九七七年以前出土の木簡(八)

平城宮跡(第一四次・第二五次・第四〇次・第四一次・第四三次)

唐招提寺講堂地下遺構

中国簡牘研究の新動向

李学勤

倉札・札家考

訳・菅谷文則

柚井遺跡出土木簡の再検討

原秀三郎

出土の文字資料からみた中世民衆生活の一面

榮原永遠男

彙報

——草戸千軒町遺跡を中心に——

志田原重人

頒価 三八〇〇円 千四〇〇円



(近江八幡)

光相寺遺跡は、滋賀県下最大の河川である野洲川の右岸下流域に位置する、飛鳥時代～奈良時代を中心とする遺跡である。その立地は、現況の水田耕土下二m余りにある埋没微高地上にあつて、遺跡はその中央を北東方向に流れる埋没旧河道の兩岸に沿うように広がるよう、住居にはあまり適さない低湿な所に所在する。なお、本遺跡を貫流する埋没旧河道の五〇〇m余

滋賀・光相寺遺跡
こうそうじ

- 1 所在地 滋賀県野洲郡中主町大字吉地・西河原
- 2 調査期間 一九八七年(昭62) 二月～一九八八年一月
- 3 発掘機関 中主町教育委員会
- 4 調査担当者 辻 広志
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 飛鳥時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

り下流左岸には、同時代に同様の立地に営まれた西河原森ノ内遺跡が所在している。今回の第八次調査第三遺構面では、七世紀中葉～八世紀前半を中心とする遺構が検出された。このうち木簡は、総柱の小規模な南北棟(三間×二間)と方位を同じくする、西側前面の幅〇・三m余りの素掘溝より(1)が、東側の幅三m以上の素掘溝より(2)と、釈読できない二点が出土した。

8 木簡の釈文・内容

(1) ・× 辻文□□□□

・× □□□□□□

(210)×29×8 011

(2) ・「田物□□□□_[料カ]□□

・「馬道□□□□

(120)×29×5 019

(1)は、木簡の上端を二次的に切断したもので、表裏共に文字間をあけて書かれているのが特徴であるが、墨痕が薄く判読できない。(2)の「馬道□□」は、西河原森ノ内遺跡一号木簡にみられた「馬道首」 「馬道」と同様の氏姓か、または「馬道郷」の郷名との関係が想起されるが、文字の遺存状態が悪く、いずれとも決めがたい。

(辻 広志)

滋賀・妙楽寺遺跡

みょうらくじ

- 1 所在地 滋賀県彦根市日夏町
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)四月～一月
- 3 発掘機関 勸滋賀県文化財保護協会
- 4 調査担当者 葛野泰樹・三宅 弘・稲垣正宏
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(彦根西部)

彦根市南部に独立丘陵の荒神山があり、地元では「荒神さん」としてあつい信仰をうけている。丘陵の西側は奈良時代の東大寺領覇流荘に比定されているところであり、弥生時代には荒神山周辺に馬場遺跡をはじめ多くの集落が開発される。丘陵上には約二五基の後期古墳が存在し、中世になると山頂や尾根上に山城が築城される。現在その北側を宇曾川が琵琶湖にそいで

おり、この河川の復旧工事に関連して、一九八四年から一九八七年にかけて発掘調査を行った。

妙楽寺遺跡は弥生時代中期から室町時代末期にいたる複合遺跡で、特に室町時代末期の遺構としては道路、石組護岸を施した大小の水路と、水路に通じる階段や洗場、さらに礎石建物・掘立柱建物・井戸・石組柵などがあり、中国製陶磁器や信楽・美濃・瀬戸などの遺物が多量に出土している。これらは荒神山に築城された日夏城の山麓にひらけた町並であり、中世戦国期の生活を明らかにするものである。

木簡が出土したのは第二遺構面の溝からである。溝は南西から北東方向にのびる幅約5m、深さ約1mの素掘溝で、中位層(有機質土層)から呪符木簡二点と板塔婆一枚が出土したが、板塔婆には墨痕は認められなかった。伴出遺物には土師器皿数点と箸状木製品約一八〇本がある。他に南側にあるほぼ同規模の溝から、片面に墨書をした板塔婆が一点出土した。

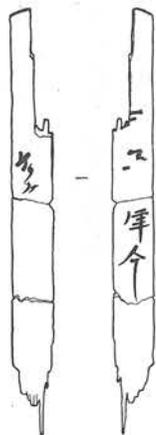
第二遺構面は礎石建物・掘立柱建物・井戸・石組柵・溝などで構成され、鎌倉時代から室町時代中頃に比定される。木簡の出土した溝は石組柵で切られており、伴出遺物などから鎌倉時代末期から室町時代初頭頃とみられる。

8 木簡の釈文・内容

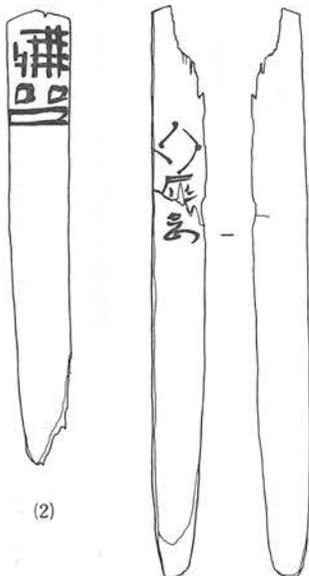
出土した木簡の中で、墨痕の認められるのは呪符木簡八点と板塔



(4)



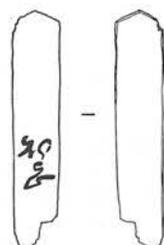
(3)



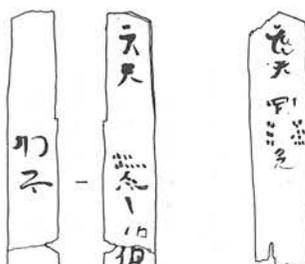
(1)



(9)



(7)



(5)



(8)



(6)



福島・南古館遺跡

みなみふるだて

- 1 所在地 福島県岩瀬郡長沼町大字江花字弘法田・泥淵
- 2 調査期間 一九八七年(昭62)五月～一九八八年三月
- 3 発掘機関 長沼町教育委員会
- 4 調査担当者 田中正能
- 5 遺跡の種類 城館跡
- 6 遺跡の年代 室町時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

南古館遺跡は、福島県中通り地方南部、岩瀬郡長沼町に所在する。



(長沼)

遺跡は町の中心部から西へ約1km離れた河岸段丘上に造られた館跡で、濠の一部と土塁が現存する。調査は一九八八年に計画された県営圃場整備の範囲内に南古館遺跡が含まれていることにより、県郡山農地事務所と長沼町との間で協議を行って実施した。調査の結果、方形の主郭

を中心に東と北に曲輪を配置する複郭構造の館であることが確認された。

遺構は主郭を中心に確認され、掘立柱建物・石積遺構・集石遺構・井戸・土壇などの他、多数の柱穴が検出された。また、濠の中より、主郭と曲輪を結んでいたと思われる橋も確認された。

遺物のほとんどは主郭と濠内から出土しており、多数の土師質土器や陶磁器類の他、金属製品(刀・鉄鏃ほか)・石製品(砥石・石臼)・銭貨(宋銭・明銭)・木製品(修羅・呪符・堅杵ほか)などが混在した状態で出土した。

館が機能していた時期としては、出土した国産陶磁器類の生産年代が一五世紀の範囲に集約されることから、一五世紀半ばから一六世紀前半にかけての比較的短い期間に限定されることが予想される。当遺跡から検出された呪符は、多数の木製品とともに濠の中より出土したものである。完形品および破損品を含め、総数四〇点を数える。墨痕が残り、肉眼および赤外線カメラ等により文字を判読できるものは六点だけである。他に墨痕が消失し、赤外線には反応しないが、肉眼で文字の痕跡を確認できるものが数点存在する。

8 木簡の积文・内容

(1) 「南無薬師如来。(穿孔)」

190×29×4

(2) 「符籙急々如律令矣」

184×24×4

9 関係文献

長沼町教育委員会『南古館Ⅰ』（一九八八年）

(3) 「梵字」大日如来

(113)×12×1

(4) 「梵字」大日如来

(111)×12×1

(5) 「梵字」大日如□

(84)×12×1

(6) 「梵字」大日如来

(164)×12×1

(市川一秋)



南古館遺跡(上が北)

山形・大楯遺跡

おおだて

- 1 所在地 山形県飽海郡遊佐町大字小原田字大楯・大槻
- 2 調査期間 一九八七年(昭62) 四月～八月
- 3 発掘機関 山形県教育委員会
- 4 調査担当者 伊藤邦弘
- 5 遺跡の種類 城館跡
- 6 遺跡の年代 鎌倉時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大楯遺跡は、庄内平野の北端、遊佐町大字小原田字大楯・大槻を中心とした水田中に位置する。標高は約一六mを測る。

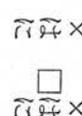


発掘調査は県営圃場整備事業によるものである。検出された遺構は、掘立柱建物・柵木列(SA10)・井戸・土壇・溝等である。柵木列は一九八六年度の分布調査で検出された箇所を含むと、東西約三〇m、南北約二五mに及び、さらに

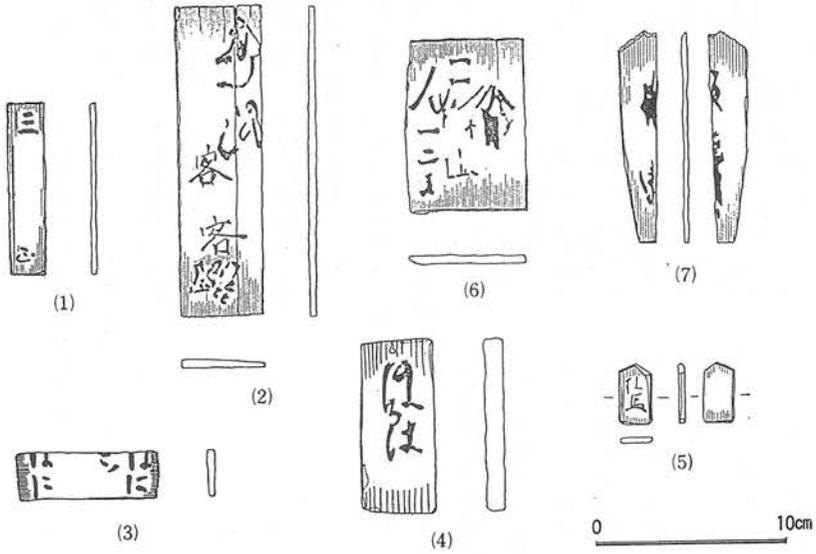
西へ続くものと考えられる。出土した木簡は、溝SD10一から四点、土壇SK二六九から一点、溝SD三八三から一点、柱穴から一点の計七点である。それぞれの遺構からは、中世陶器(珠洲系陶器)や木製品(箸・櫛等)が出土している。

本遺跡の性格としては、安部親任の『筆濃余理』に記述された遊佐殿の居館、あるいは、文治五年(一一八九)源頼朝の藤原泰衡征伐で投降し、本領を安堵された川北冠者忠衡が居館を構えた地域と推定される。

8 木簡の積文・内容

- (1) 「三」
93×19.5×3 011
- (2) 「客 客」
169×44×3.5 011
- (3) 
(25)×7.5×3 081
- (4) 「(穿孔)ほろほ」
95×39×10 011
- (5) 「桂馬」
34×17.5×3 061

木簡の形態は短冊形が多い。(2)は文字の他に猪・兎と下方に猿と考えられる三匹の動物が横位に描かれ、文字は兎と猿の間に書かれている。絵暦の可能性がある。(4)は「保呂羽」と考え、東ねた矢羽



に付けた付札と思われる。(5)は将棋の駒である。本県で歩以外の駒が出土した初例となる。他の二点は墨痕が残っているが、文字か絵か判然としない。

(伊藤邦弘)

『下野国府跡Ⅶ―木簡・漆紙文書調査報告―』の刊行

下野国府跡の発掘調査は、栃木県教育委員会によって、一九七六年より実施されているが、現在までに五〇〇〇点をこえる木簡の出土をみている。その概要は同教育委員会『下野国府跡Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ』等で報告され、本誌にも年毎の紹介がされているがこのたび木簡・漆紙文書についての正報告書が刊行された。

一九八四年三月までに出土した分を対象として、木簡約四二〇〇点余と漆紙文書・墨書土器について、写真図版・釈文および解説を掲載した充実した報告書となっている。

栃木県教育委員会発行 一九八七年三月刊

図版二二二枚、本文A五判 一七九頁、頒価 三五〇〇円

送料七〇〇円

申し込み先 〒320 宇都宮市桜四一―二―一

（財）栃木県文化振興事業団

木簡研究 第七号

卷頭言—刀筆の吏—

土田直鎮

一九八四年出土の木簡

- 概要 平城宮・京跡 平城京跡 奈良女子大学構内遺跡 法貴寺遺跡
- 藤原宮跡 長岡京跡(1) 長岡京跡(2) 長岡京跡(3) 百々遺跡
- 今里遺跡 平安京左京八条三坊二町 平安京左京九条二坊十三町
- 水走遺跡 西ノ辻遺跡(1) 西ノ辻遺跡(2) 坪井遺跡 忍ヶ丘駅前遺跡
- 普賢寺遺跡 大庭北遺跡 輕里遺跡 堺環濠都市遺跡 池田寺遺跡
- 道場塩田遺跡 新方遺跡 川岸遺跡 倉見遺跡 前東代遺跡
- 赤堀城跡 朝日西遺跡 清洲城下町遺跡 杓掛城跡 吉田城三ノ丸跡
- 坂尻遺跡 秋合遺跡 郡遺跡 神明原・元宮川遺跡 北条泰時・時頼邸跡
- 千葉地遺跡 千葉地東遺跡 藏屋敷遺跡 小敷田遺跡
- 大津城跡 上永原遺跡 野々宮遺跡 野瀬遺跡 小谷城城下町遺跡
- 尾上遺跡 北方田中遺跡 永田遺跡 膳棚B遺跡 御前清水遺跡
- 仙台城三ノ丸跡 市川橋遺跡 多賀城跡 比爪館遺跡 大浦遺跡
- 弘田柵跡 馬場屋敷遺跡 百間川当麻遺跡 鹿田遺跡 草戸千軒町遺跡
- 西庄Ⅱ遺跡 井上薬師堂遺跡 荒堅目遺跡

一九七七年以前出土の木簡(七)

平城宮跡(第三九次)

公式様文書と文書木簡

中国における最近の漢簡研究

英国出土のローマ木簡

木簡史料紹介—牛札—

彙報

早川庄八
大庭 脩
田中 琢
石上英一

頒価 三八〇〇円 千四〇〇円

木簡研究 第六号

巻頭言——記紀批判と木簡——

直木孝次郎

一九八三年出土の木簡

概要 平城宮・京跡 平城京二条大路・左京二条二坊十二坪 平城京左京八条三坊十一坪 東大寺仏餉屋下層遺構 藤原宮跡 長岡宮・京跡 平安京右京八条二坊 定山遺跡 水走遺跡 津堂遺跡 高宮遺跡 池上・曾根遺跡 万町北遺跡 山垣遺跡 福成寺遺跡 沢田宮谷遺跡 長尾沖田遺跡 小川城遺跡 道場田遺跡 宮久保遺跡 鹿島湖岸北部条里遺跡 東光寺遺跡 北大萱遺跡 篠脇遺跡 北稻付遺跡 鯉沼東Ⅱ遺跡 下野国府跡 多賀城跡 一乗谷朝倉氏遺跡 近岡遺跡 曾根遺跡 前田遺跡 美作国府跡 草戸千軒町遺跡 尾道遺跡 芳原城跡 大宰府跡

一九七七年以前出土の木簡(六)

平城宮跡(第三二次)

平安時代の日記にみえる木簡

山田 英雄

日本古代の人口について

鎌田 元一

彙報

『木簡研究』一～五号総目次

頒価 三五〇〇円 千四〇〇円

木簡学会会則

第一条 本会は木簡学会と称する。

第二条 本会の事務所は奈良県内に置く。

第三条 本会は木簡に関する情報を蒐集・整理し、木簡そのものについての研究・保存を推進するとともに、その成果の普及をはかり、史料としての活用を資することを目的とする。

第四条 本会は前条の目的を達成するため、つぎの事業を行う。

- 1 木簡に関する情報の蒐集および整理
- 2 研究会の開催
- 3 会誌『木簡研究』その他の刊行
- 4 発掘調査組織、その他関連する学会・機関との連絡および協力
- 5 その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条 木簡の調査・研究に従事し、本会の趣旨に賛同する者は会員になることができる。

二 本会に入会しようとするものは、会員二名の推薦を必要とし、委員会の承認を得なければならない。

三 会員は所定の会費を納入しなければならない。会費の額は総会において決定する。

四 会員は総会における議決権を有し、会誌の配布をうけ、そ

の他の前条の事業に参加することができる。

五 会員に本会の目的の遂行をさまたげる行為のあった場合には、委員会はこれを除名することができる。

第六条 本会は次の役員をおく。

- 1 会長一名
- 2 副会長二名
- 3 委員若干名
- 4 監事二名

第七条 委員・監事は総会において選出され、任期は二年とする。ただし、再任はさまたげない。

二 委員は委員会を組織し、会則にもとづき会務を処理する。
三 会長および副会長は、委員会の互選による。会長は本会を代表し、会務を総括する。副会長は会長を補佐する。

四 監事は会計および会務の執行を監査する。

第八条 本会は毎年一回総会を開く。

第九条 本会の経費は会費および寄付金をもってあて、総会において会計報告を行うものとする。

第十条 この会則の変更は総会において議決するものとする。

第十一条 委員会は会務運営のため、幹事若干名を委嘱し、また細則を定めることができる。

彙報

第九回総会および研究集会

木簡学会第九回総会と研究集会は、一九八七年二月五、六日の両日にわたって、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂において、約一三〇名の参加者をえて開催された。会場には、平城宮跡（佐紀池南辺地区）、平城京跡（左京三条二坊七坪）、藤原宮跡（五四―一五五次）、滋賀県宮町遺跡、福井県田名遺跡、大坂城跡出土木簡のほか、保存処理をした平城宮跡出土の木簡と削屑が展示され、関心をよんだ。

◇二月五日（土）（午後一時―五時）

第九回総会（議長 今江広道氏）

最初に平野邦雄会長の挨拶があり、岸俊男前会長・浅香年木会員、もと会員の坂本太郎氏が死去され、木簡学会の十周年記念事業として木簡図録を刊行すること、六月と二月の委員会で一名の入会が認められて会員が二二四名となり会員数が順調に伸びていること、入会申し込み書の書式を一部改めたことなどが述べられた。続いて議長に今江広道氏を選出して議事に入った。

会務・編集報告（鬼頭清明委員）

会員数は、一一名の新入会員を迎えて二二四名であること、昨年、委員の改選が行なわれ、会長に平野邦雄氏、副会長に大庭脩氏・田中琢氏、監事に田中稔氏・長山泰孝氏が選出されたこと、十周年の記念出版の概要、会誌第九号の編集経過などが報告され、承認された。

会計報告（岩本次郎委員）

一九八六年度の会計報告が行なわれ、年度の収支、第九号の定価（三八〇〇円、送料四〇〇円）についての説明があり、引き続き田中稔監事から、長山泰孝監事と共に監査を行い、会計の執行が正当、適切に行われていることを確認した旨報告があつて、異議なく承認された。

研究集会（司会 松下正司氏）

中世の木簡について

石井 進氏

木簡の保存処理

沢田正昭氏

両氏の報告はともに本誌に掲載することができた。

研究集会終了後、グリラ友楽で懇親会がひらかれた。

◇二月六日（日）（午前九時三〇分―午後三時）

研究集会（司会 笹山晴生氏・八木充氏）

一九八七年出土の木簡

綾村 宏氏

田名遺跡出土の木簡について

田辺常博氏・館野和己氏

地方出土古代木簡の様相

鬼頭清明氏

綾村報告は、一九八七年に木簡の出土した三六遺跡について、木簡出土遺構と木簡内容の概要を報告したものである。田辺報告では、スライドをまじえて田名遺跡の説明が行われ、館野報告は、これまで出土した若狭国の貢進物付札を全て集成してその特色を指摘し、さらに今回出土した木簡は、三方郡の能登里か三方郡家で書かれたもので、現段階では、後者の可能性が大きいとした。鬼頭報告は、大和・山城以外の地方から出土している古代木簡の内容を分析し、その問題点を指摘したもので、木簡は官衙的色彩の濃い所から多く出土していて、漢字の識字層との関わりが考えられること、大形の記録簡は国府跡出土のものが少ないこと、地方出土の荷札木簡には、国名を記さず郷名から書き始められているものがあることを指摘し、木簡がどの段階で書かれたのか、貢進物がどこで使われたかを考察したものである。

それぞれの報告については、質疑討論が活発に行われ、総括討議で締めくくられた。最後に田中琢委員から閉会の辞があり、参加者への謝辞が述べられた。

委員会報告

◇一九八七年一月五日(土)

於奈良国立文化財研究所

総会に先立って、会務・編集の状況、総会・研究集会の運営、十周年記念事業等について検討が行われた。

◇一九八八年六月一日(水)

於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、一九八七年度の会計報告、『木簡研究』一〇号の編集計画、『古代木簡集成』(仮題)出版に対して特別予算を組むこと、幹事を追加することなどが論議された。同日、会計監査も行われた。

◇一九八八年一月二日(金)

於奈良国立文化財研究所

新入会員の承認、一九八八年度前半の会計中間報告、研究集会の内容の検討を行い、『古代木簡集成』の編集状況について報告があった。

PROCEEDINGS OF JAPANESE SOCIETY
FOR THE STUDY
OF WOODEN DOCUMENTS

NO. 10 1988

CONTENTS

Foreword —Ten Years of Our Society—.....Hidesaburo Hara.....	i
Wooden Tablets Excavated in 1987	1
Outline	
Explanatory Notes	
Nara Palace and Capital Site, Nara Prefecture; Kofukuji Temple Site, Remains of Chokushimon Gate, Nara Prefecture; Fujiwara Palace Site, Nara Prefecture; Fujiwara Capital Site, Nara Prefecture; Remains of Fujiwara Capital Eastern 3rd Ward on 9th Street, Nara Prefecture; Kidera Temple Site, Nara Prefecture; Nagaoka Palace Site, Kyoto Prefecture; Nagaoka Palace and Capital Site, Kyoto Prefecture; Toba Palace Site, Kyoto Prefecture; Remains of Chiyokawa, Kyoto Prefecture; Remains of Yadani, Kyoto Prefecture; Osaka Castle Site 1, Osaka Prefecture; Osaka Castle Site 2, Osaka Prefecture; Remains of Kajiwaraminami, Osaka Prefecture; Remains of Eibara (Toyoura District), Hyogo Prefecture; Remains in Nagatajinja Shrine, Hyogo Prefecture; Shosha Sakamoto Castle Site, Hyogo Prefecture; Remains of Sunairi, Hyogo Prefecture; Remains of Sugaito, Mie Prefecture; Town Site surround Kiyosu Castle, Aichi Prefecture; Iwakura Castle Site, Aichi Prefecture; Remains of Kachigawa, Aichi Prefecture; Remains of Kariyasuka, Aichi Prefecture; Remains of Yamanaka, Aichi Prefecture; Remains in 107, 1chome, Koma- chi, Kanagawa Prefecture; Remains of Miyamachi, Shiga Prefecture; Remains of Kawatakawaharada, Shiga Prefecture; Remains of Kosoji,	

Shiga Prefecture; Remains of Myorakuji, Shiga Prefecture; Remains of Kamabuchi, Nagano Prefecture; Remains of Minamifurudate, Fukushima Prefecture; Remains of Odate, Yamagata Prefecture; Remains of Tedorishimizu, Akita Prefecture; Remains of Kadoya, Fukui Prefecture; Remains of Yokoenosho, Ishikawa Prefecture; Remains of Shiratsuki, Shimane Prefecture; Remains of Kusadosengencho, Hiroshima Prefecture; Remains of Nobuyukijori, Yamaguchi Prefecture; Nagato Kokubunji Temple Site, Yamaguchi Prefecture; Remains of Anyoji, Yamaguchi Prefecture; Konkoji Temple Site, Fukuoka Prefecture; Remains of Hakata, Fukuoka Prefecture; Remains of Yoshinogari, Saga Prefecture; Remains of Mo-toorimuta, Saga Prefecture;	
Wooden Tablets Excavated before 1977 (10)	89
Nara Palace Site (44th Excavation)	
A Form of Wooden Documents in Medieval Age—Survey of YAMAFUDA (山札) and KAYAFUDA (茅札)	Susumu Ishii.....93
Law and Custum from NISSHO (日書) —Bamboo Documents Excavated from Ch'in Dynasty Tomb of Sui-hu-ti in Yunmeng Country Motoo Kudo.....	113
Preservation of Wooden Tablets.....	Masaaki Sawada..... 130
Bibliography No. 6—No. 10	138
The List of Reports by The 10th Congress of Our Society.....	150
A General Catalogue of The Sites Excavated Wooden Tablets in Japan Yasuhiro Terasaki.....	198
A General Catalogue of Reports on Excavated Wooden Tablets Yasuhiro Terasaki.....	180

Published by
JAPANESE SOCIETY
FOR THE STUDY OF WOODEN DOCUMENTS

一九八八年十一月二十日 印刷
一九八八年十一月二十五日 発行

〒630 奈良市二条町二丁目九番一号
奈良国立文化財研究所

編集発行

木

加藤 優 氣付
簡 学 会
会長 平野 邦 雄

京都市下京区油小路仏光寺上ル

印刷

眞 陽 社

TEL(05)351-6034

ISSN 0912-2060

